

北区民まちづくり会議 第1回ひと・まち活性化部会 摘録

日 時： 平成29年10月31日（火）午後6時30分から午後8時20分

場 所： 北区役所大会議室

【開会】

○事務局

開会宣言

【区長挨拶】

○松本区長

皆さんこんばんは。本日は大変お忙しい中、このように沢山の方にお集まりいただきありがとうございます。また、京都市政並びに北区政に多大なるご尽力をいただき、御礼申し上げます。

本日の部会のテーマは、「子どもを産みたい、育てたいと思える環境づくり」。人口減少社会に真正面から立ち向かうためには、子どもを増やしていかなければいけないということで、このようなテーマを設定した。

京都市では、子ども若者に関わる施策を一体的に推進していく、また、地域で子どもを育む文化を創造していこうということで、今年度から子ども若者はぐくみ局という新しい局を創設した。

それに併せて、区役所でも子どもに関する施策について、福祉と保健の切れ目をなくして相談を受けることができる、子どもはぐくみ室を創設した。このようにして、子どもに関する施策を社会全体で整えようとしている。

本日は、普段から子どもと関わっておられる皆さんにお集まりいただき、普段感じておられることを、活発にご議論いただきたいと思います。

子どもの笑顔が溢れる北区の実現を共に描いていけるように、積極的なご議論をいただけることをお願いし、挨拶とします。

【議事】

○事務局

続いて、初対面の方々もおられるため、各テーブル内で自己紹介をお願いします。

<自己紹介>

それでは本日の会議を始めます。会議の進行については、本部会の部会長である藤野先生にお願いしたいと思う。藤野先生、よろしく申し上げます。

○藤野部会長

それでは、お手元の次第に従い、議事を進行させていただく。「議題1 子どもを産みたい、育てたいと思える環境づくりに係るワークショップについて」、ワークショップに入る前に、

前方のスクリーンで、ひと・まち活性化部会のねらい及び昨年度の議論の内容、本日の流れについて、事務局から説明していただく。

○事務局

＜（パワーポイント）に基づき説明＞

まず、昨年の部会では、人口減少問題を空き家対策の側面から議論した。

8月30日の第1回部会では、京都市における空き家対策について、各学区の空き家の現状を共有し、11月14日の第2回部会では、京都市地域連携型空き家流通促進事業コーディネーターによる空き家対策の講演や今後の取り組むべき方向性について議論した。

こうした中、部会としては次のとおり結論を得た。

①地域の取組としては、空き家が地域全体の共通課題であることを認識し、日頃から空き家の適切な把握に努める、また、学区の更なる魅力を高めていく取組を進めること。

②北区役所の取組としては、空き家所有者が気軽に安心して相談できるよう、北区役所において定期的な空き家相談会の開催を検討すること、通報を受けた管理不全空き家について迅速に現況確認し、市役所と連携し早期解決を図ること。

今年度は、子どもを産みたい、子どもを育てたいと思える環境づくりをテーマに議論を進めていきたい。

本日は、子どもや子育て世代と接しておられる皆さんが感じておられる課題を、1月は、地域で子どもを育てていくためにできることについて議論したい。

北区の現状について簡単に振り返りたい。平成29年10月現在の北区の年齢別人口、北区の合計特殊出生率の推移、昭和50年以降の北区の出生・死亡の推移はグラフのとおりとなっている。死亡率については上がっているが、出生率については下がっている。

子育てに係る環境の変化について、一例ではあるが、インターネットで情報が得やすくなったことで、経験者に直接聞かなくても悩みが解決できることや、夫婦と未婚の子どものみの核家族を選択する人が大勢いるというように環境が変わってきている。

こういったことで、近所のおじちゃん、おばちゃんといった、身近な大人と親子が関わる機会が少なくなっているように思う。

一つの家族を取り巻く環境については、保育園や幼稚園、小学校、児童館といった施設や居場所、また、子どもに関わる各種団体から家族に向けて様々なサポートをしているが、家族側は、インターネットで情報を得る、悩み相談は親や同世代の友達にしており、近所の人との関係が希薄になっているのではないかと。その辺りがどうなっているのかということも、議論したい。

出生率が低下している要因の例としては、働く女性が増えて、晩婚化していることや、考え方が多様化しており、結婚しない人や子どもを産まない人が従来より増えていること、また、子育てに係る経済的な不安があることなどが、京都市の実施しているアンケートで上がってきている。

今回は、“子育てに係る漠然とした不安がある”という意見について、解決できることがないかを探っていきたい。

子どもを産み育てたいという環境を作ることが、人口減少対策になると考えている。

目指したい未来の像として、「子どもが居る、居ないに関わらず、どんな人も、子どもを温かく見守れる、北区」、「子どもが居る人も居ない人も、生きやすい社会」、「赤ちゃんの泣

き声を「うるさい！」と感じないようなご近所との顔が見える関係性」を築いていきたいと考えている。

本日は、皆さんが、子どもや子育て世代の方と接しておられる中で感じておられる子育てに係る課題やご意見を聞かせていただきたい。

○藤野部会長

ありがとうございました。事務局からもあったように、本日の会議では、“誰もが子どもの健やかな成長を見守れる”，“地域で子育てを応援していく”，“ご近所との顔が見える関係性” そんなまちにするために、普段子どもや子育て世代に関わっておられる皆さんが日々、それぞれのお立場で感じておられる子育てについての課題やご意見を出し合っていたら、それをヒントに私たちができることを考えていきたい。

京都は、全国的にも出生率が低い。私の行った調査に因ると、第一子目で育児不安を抱えた場合、第二子を産まないということが、2千人の女性を対象に行ったアンケート結果で分かった。

それでは、早速 ワークショップを始めていきたい。各テーブルの進行役さん、よろしくをお願いします。

~~~~~

## 【①各テーブルのワークショップ】

### <Aテーブル>西原まちづくりアドバイザー

#### ○A委員

子どもを育てていくには、お金が掛かる。子どもが産まれたら税金をただにしてはどうか。産まれても安心できる環境づくりを考えたときに、金銭面には大きな比重がある。

自分は、2人目の子どもが産まれた後、妻の体調がよくなかったので、自営業の仕事を完全に辞めて、子どもの面倒を看なければいけなかった。

#### ○片木課長

病気になった子どもは保育園で預かれないので、病児保育をしてくれる施設が必要。労働施策として、病気の子どもの居たら仕事が休めるようにしないといけない。

#### ○A氏（大谷大学生）

子育てするに当たって、母親は、自分が子どもを上手く育てられているのか、不安があるのではないかと。子育てサロンのような場があると、同じ思いのお母さんに出会え、悩みを共有できたり、アドバイスをもらうことができる。

そういう場が少なければ、ネットに頼ることになるのではないかと。母親同士の触れ合いが大事だと思う。

#### ○B氏（元町学区民生児童委員）

元町学区では、子育てサロンを開いていて、そこでお母さん同士の交流もある。

#### ○C氏（上賀茂おやじの会）

自分は、1人目が産まれた時には情報が得られず、近くにある児童館で子育てサロンをやっていることすら知らなかった。家の外に出なければ情報は得られない。

#### ○四元係長

自分は小学生の子どもが1人居るが、仕事をしながら育てるとなると、同じ小学校のお母さん方となかなか触れ合う機会がない。保育園や児童館では、迎えに行くタイミングで会話もあったが、小学校の高学年になるとなかなか繋がりが持てない。漠然とした不安は、話すだけで解消されるが、自分自身、参加しようという気力がないと難しい。

#### ○D氏（元町社会福祉協議会）

NPOなどで子どもの読み聞かせなどしているが、そういった情報がなかなか必要な人に繋がらない。

一昔前は、公園デビューという言葉が流行っていた。サロンなどではなく、公園で情報交換するということがよくあったが、今や子どもが少なく、そういった場面も見掛けることが少なくなった。

自分が子育てしていた時は、共同住宅に住んでいて、同じ世代が沢山いたので、団地内で「ちょっと子どもを見ておいて。」ということができた。

今は全然環境が違う。子どもの絶対数が少ない。同世代の親が近くにいれば、そういった関係ができるかもしれないが、それも難しくなっている。

#### ○B氏（元町学区民生児童委員）

共働きが増えたことで、随分と状況が変わった。

#### ○D氏（元町社会福祉協議会）

核家族も増え、状況が変わった。このことについて、地域としてどうしていくかということを考えていかなければいけない。危機感を持っている人が子育てサロンなどを開いているが、それが子育て世代とマッチングしていない。どうマッチングさせるかが課題。

#### ○西原まちづくりアドバイザー

マッチングできていない親御さんはどこで不安を解消しているんだろうか。

#### ○片木課長

核家族を選んでいる人が多い中で、それをやめろとは言えない。核家族を前提にして、どういったことができるかを考えていく必要がある。

#### ○西原まちづくりアドバイザー

子育てで頑張っているのに、更に繋がりづくりで頑張りを重ねないといけない。

#### ○四元係長

自分で子育て情報収集をしないといけないことの労力と、自分が選択してきた核家族について生じる困難は、自分で何とかしないといけないという気持ちがある。両親が共働きだと、子ども自身も、平日も遊びにいける友達の家がなく、友達の親と接する機会も少ない。もう少し触れ合えたらいいのと思うが、どう解消できるのかは、難しい。

#### ○C氏（上賀茂おやじの会）

1人目がそこそこ大きくなるまでが、孤独を感じる。出産する病院が近所がないので、そこで知り合いができて、関係が続かない。やはり、身近な地域で知り合いが欲しい。

#### ○四元係長

妊娠の時からほかの妊婦さんと触れ合える場所があればいいと思う。

#### ○西原まちづくりアドバイザー

人と繋がる機会は妊娠、出産、サロン、保育園・幼稚園・小学校などのタイミングがある。1人目の時は、パパ教室みたいなものに自分も行った記憶があるが、友達はできなかった。

#### ○A委員

妊娠した時点で、相談できる人がいるかどうか大きい。普段から地域に友達を作っておきたいと思う。緊急の時に相談できるような部署が役所にあってもいいのではないかなと思う。

**○西原まちづくりアドバイザー**

子どもが産まれたタイミングで新しい土地に行き、夫婦共働きで地域に馴染んでいないというパターンは多くあると思う。

**○B氏（元町学区民生児童委員）**

主任児童委員が訪問して話をするが、腹を割って話す、相談するという人が少ない。放っておいてほしい、入りこまないでほしいということが多く感じる。特にここ10年は、近所との繋がりを必要とされていない人が多いように感じる。何でもインターネットで調べられる。

**○C氏（上賀茂おやじの会）**

町内会加入促進も根っこは同じところにある。

**○西原まちづくりアドバイザー**

不安に感じている人がいるというのは、逆に言えばチャンスだと思うが。

**○B氏（元町学区民生児童委員）**

働く方が増えると、なかなかコンタクトが取れなくなる。

**○四元係長**

働き出して、子どもを保育所入れると、地域との関係性を繋ぐ時間が取れなくなってくる。

**○西原まちづくりアドバイザー**

自分にも小さい子どもがいるが、地域で相談するというのではなく、友達、親、ネット情報になる。

**○A氏（大谷大学生）**

親は、傍からどう見られているかを気にしているのではないかな。相談すること自体に、子育てができない人と思われるのではないかなという不安があるのかも。

**○西原まちづくりアドバイザー**

相談することが、気軽に当たり前な状況でないのはなぜだろう。

**○A氏（大谷大学生）**

良い母でいようとする人が多いのではないかな。自分は完璧でないとだめ、人に聞かずに成し遂げないといけないと思う人が多いかもしれない。

**○片木課長**

インターネットには答えしか載っていないので、それだけを見ると、そのようにしなければいけないと思ってしまう。

**○C氏（上賀茂おやじの会）**

同世代で相談できる人がいるのが一番いいと思う。早くに子どもを産んだ同世代の人に相談できる環境があれば、気軽に参加できる。

**○片木課長**

住環境がどうなのか。先ほど団地の話が出たが、マンションの同世代で話ができるような環境がいいのか、多世代が交流できた方がいいのか。

**○C氏（上賀茂おやじの会）**

同世代同士からでもそのようなことを始められたら、次の世代にも繋がってほしいと思う。

**○A氏（大谷大学生）**

子育て経験者に話を聞くことは、安心でき、共感もできる。

### ○西原まちづくりアドバイザー

子育て情報は、何年で新旧、ブームが変わるのだろうか。子どもを育てるという意味では変わらないが、育て方については、今はやり方が違うとか、情報が古いということもある。その辺りをどうしていくのいいかは、次の機会に話すことにし、悩みの部分を掘り下げていくことにする。

### ○A委員

昨今、なぜ晩婚化になってしまったんだろう。

### ○B氏（元町学区民生児童委員）

結婚より、仕事の方が楽しいという人も多い。

### ○A氏（大谷大学生）

医療技術が発達し、高齢出産が可能になってきている。出産も後回しになっている。

### ○西原まちづくりアドバイザー

先ほど、声を掛けづらいという意見があったが、それは、なぜだろう。

### ○A氏（大谷大学生）

若い人も声を掛けてもらいたいと思っているが、自分からはアクションを取りづらい。

## <Bテーブル>吉田まちづくりアドバイザー

### ○吉田まちづくりアドバイザー

子どもと接しておられる中で受ける相談や、昔と今の違いであったり、もっとこういうことがあれば、皆さんの活動が良くなるのに、というようなことをざっくばらんにお話いただければと思う。

### ○E氏（体育振興会）

体育振興会を長くやっているが、昔の子どもと今の子どもの大きな違いは、子どもの習い事がとても多くなったということ。体育振興会のイベントによく来ていた子どもも、習い事で忙しくて来られなくなったというようなことがよくある。就学前から、忙しい。

### ○F氏（上賀茂学区民生児童委員会）

小学校4年生くらいから、中学受験に向けて塾に行き出すことが多い。上賀茂でも中学校から私立に行く子どもが多い。

### ○B委員

京都は私立が多いので、小学校から私立に行く子どもも多い。

先日、京都子ども子育て会議でこれから必要となる保育料が見積もられたが、上賀茂、柘野、大宮学区の北1エリアは子どもの数が増える傾向にあり、受け入れの定員を増やさなければいけない。

一方で、衣笠、鷹峯、大將軍の辺りの北2エリアについては、子どもが減る傾向にあり、定員に満たない状況。子どもが増えないということに何か原因があるのではないかと。

### ○F氏（上賀茂学区民生児童委員会）

主任児童委員が子育てサロンを児童館で開催している。1歳の子どもが22組も来てくれた。児童館が所狭しという状況。主任児童委員だけでなく、民生委員や社会福祉協議会なども手伝いに入り、協力体制ができている。

### ○B委員

今は民生児童委員さんが中心になってくれているが、もう少し役割を分担してもいいように思う。町内会単位の子育てサークルができて、顔の見える関係の中でお母さん同士の交流の場ができればいいと思う。

#### ○F氏（上賀茂学区民生児童委員会）

先日、大谷大学ですくすく赤ちゃん広場を開催したが、69組ほどの親子が参加してくれた。その中でも上賀茂学区から来ている人が多かった。

#### ○G氏（てーげー食堂）

自分は元々、高齢者を対象にした活動をしていたが、ご縁があり、子ども食堂を実施することになった。

別の仕事を持ちながら実施しているが、広報面で苦戦している。そもそも、どこに子どもがいるかが掴めない。柏野小学校から歩いて15分くらいのところにある町家を借りて実施している。

育児ノイローゼになっているようなお母さんが来られているが、参加者が少ないので、発散できない状況。運営側の人数も増えれば、子どもの人数も増やしていけるが。

1人からでも参加できるので、今は大人食堂のようにになっている。開催が土曜日の夜だが、平日の方が預かってもらいたい人が多いのかもしれない。

#### ○F氏（上賀茂学区民生児童委員会）

上賀茂にも8月くらいから子ども食堂ができています。

#### ○吉田まちづくりアドバイザー

大人食堂になっているということだが、お年寄りが多いのか。

#### ○G氏（てーげー食堂）

30～40代の子ども食堂に興味がある人が数人と、お年寄りが数人来られている。住宅地の真ん中にあるので、看板を出していても目立たないのかもしれない。

#### ○C委員

親が子どもに手を掛け過ぎている。お母さんは子どもの自慢話が多く、それに対抗するように子どもに手を掛ける傾向がある。地域としては、大変なお母さんの受け皿を作らないといけないと思っている。

受け皿というのは施設ということではなく、町内会などの近所づきあいの繋がり。町内の中で、どのくらい子どもさんがいるかなどを把握し、町内の中で支えていくことが大事だと思う。

行政と地域が一緒になって、地域の中でどういう仕組みができれば、安心して子どもを産めるといような取組を行ったうえで、子育て支援の施設に繋がっていく。

男性も女性も一緒になって仕組みを考えていくことが大切。

#### ○吉田まちづくりアドバイザー

地域、町内で子育てをサポートするという話が出たが、いかがか。

#### ○E氏（体育振興会）

昔のように子どもがたくさんいれば、クラス替えで人も入れ替わり、仮に落ちこぼれたとしても、子どもが楽しければいいやと思えるが、少人数だと親も気にする。

#### ○C委員

子どもが少ないから親が手を掛けるということもある。どうすれば子どもを増やせるかということを考えた時に、経済的、精神的な負担を誰かがカバーしなければいけない。国の施

策として、取り組まなければいけないこともあるだろう。

### ○川妻部長

働き方も大きく影響する。女性が子どもを産むことについては、少なからず負担になる。体への負担も大きいし、仕事も休まないといけないことになる。仕事をしながら、妊娠・出産・育児をするとなった時に、体制が整っていなければ、どうしてもハードルが上がる。

### ○F氏（上賀茂学区民生児童委員会）

仕事のキャリアを維持しながら子育てをしようと思うと、難しいこともあるかもしれない。役職のランクを落とすというような選択肢もある。

### ○川妻部長

男性陣には、この人のために子どもを産みたいと思えるような男性になるように頑張ってもらいたい。また、日本はシングルマザーに対する意識がまだまだ低い。アメリカなどは、結婚に囚われず、キャリアを積みながら子育てができるような仕組みがある。

自分が小さいころは、親が働いていたので、よその家にお邪魔することが当たり前だったが、今は個人情報のこともあり、例えば近所の人が子どものお迎えに行っても、子どもを渡せないような状況になっている。

困ったときに、近所の人にすぐに頼めるような状況があれば、フルタイムで働いている女性もより働きやすいと思う。

また、昔あったような銭湯文化は、いろんなコミュニケーションができる、また、道德教育ができるような良いものだった。小さい頃からいろんな大人に出会うような機会が多くあれば、視野が広がると思う。

### ○H氏（大谷大学講師）

自分が子育てをしていた頃は、近所づきあいもあり、保育園のお迎えに代わりに行っていただくようなことがあった。

しかし、預かっている子どもに怪我をさせたことが訴訟問題になるというようなことが起こる社会の中で、段々と個人で預かることがなくなってきた。

子育てのサロンなどが沢山あることはいいことだと思うが、家から歩いて行ける距離でないと、どうしてもハードルが上がる。近所の駄菓子屋さんに行くような感覚で、子どもを連れて歩いて行けるような場所が沢山あればいいと思う。

大学として、子育て支援に関わらせてもらっているが、そこに来てくれるお母さん方は、「自分が参加することで学生のボランティアの学びに繋がり、学生の役に立つことによって、社会に貢献していると感じる。」と言ってくださる。支援されるとか支援するとかいうことではない関係ができています。

家で1人で子育てしている人もいるということで、学生が精力的に広報を頑張っている。

### ○F氏（上賀茂学区民生児童委員会）

先日、朝日新聞の窓欄で28歳の女性が、「子育てにはお金が掛かる、自由にお金を使いたいので、結婚はしない。」という投稿をしていたが、ある人が、「私も子育てをしてきたが、今後は、お金と時間は人のために使いたい。」とコメントされていた。

### ○C委員

年齢によって、その辺りの考え方は変わるかもしれない。

### ○E氏（体育振興会）

何をするにしても、自分が楽しくないとやっていけないと思う。



### ○G氏（てーげー食堂）

若い人の所得が減ってきている。自分は、NPO法人で働いているが、手取りが11万円。この所得で、子育てをしていけるとは思えない。

### ○B委員

一方で、高学歴で仕事をバリバリしているほど、晩婚化で子どもが少なく、低所得の人ほどたくさん子どもがいたりする。収入と子どもの人数が比例しない場合もある。

### ○吉田まちづくりアドバイザー

鹿児島県の徳之島では、合計特殊出生率が2.8人とかなり高いが、鹿児島の中で一番所得水準が低い。子沢山な島になっている。沖縄などもそうだが。

### ○C委員

優先順位の問題ではないか。自分の贅沢を取るのか、子どものことが優先するのか。

### ○H氏（大谷大学講師）

保育園に入ってこられる親御さんを見ていると、その他の親御さんや先生、子どもたちと接する中で、もう1人欲しいなという気持ちが湧いてこられることがある。所得に限らず、親同士の繋がりで安心できる環境にあれば、そういう気持ちになることもあるかもしれない。

### ○G氏（てーげー食堂）

土日に外を歩いているけど、子どもを見掛けることが少ない。

## <Cテーブル>谷まちづくりアドバイザー

～各人に付箋を書いてもらい意見発表～

### ○I氏（鷹峯自治連合会）

今の子どもたちは挨拶ができない、元気がないと感じる。こちらから挨拶をすれば、ようやく挨拶をする。これは大人も同じである。地域全体を見たときにその点が気になる。北区では、まず、しっかり挨拶することを実施していきたい。

ただし、スポーツをしている子どもたちは、すれ違う時に、必ず挨拶をする。大人がしなければ、子どももしない。

### ○D委員（特定非営利活動法人コミュニティラジオ）

核家族では、子育てが難しくなっている。最近、お節介を焼く大人も減ってきている。

国、行政の支援策も不足しているのではないかと思う。地域の交流も減少しており、子ども同士の交流も少ない。公園でも、大人と子どもが遊ぶ姿は見掛けるが、子ども同士が遊ぶ姿を見掛けない。

また、地域でシャッターが閉まっている店や住居が多い。開けていただいたら、まちも明るくなる感じる。子育てが楽しくなるまちづくりはどうしたらできるのかということを考えていきたい。

### ○J氏（金閣学区主任児童委員）

自分は原谷に住んでいるが、地域では、子どもが本当に少ない。中高生もほとんどいない。子育てサロンを実施しているが、母親は色んな話をしてくれる。お祝い訪問などで若いお母さんと接する機会はあるが、ほとんどが親御さんが近くに住んでおられるということだ。

他地域から移住されて来られた人は、サロンに来られない傾向にあると感じている。サロンに来ておられない方にも是非来てほしいが、どこにおられるのか探すことができない。

また、先ほど、スポーツしている子どもたちは挨拶をするという意見があったが、そうい

った子どもたちも、スポーツの人間関係の中では挨拶をするが、地域の人たちには挨拶しないと感じる。

#### ○中山課長

親同士の関係が希薄である。親同士の関係が希薄であれば、子どもたち同士が付き合うことも減ってくる。大人同士が挨拶するような姿が減ってきていると感じる。

また、子どもが外で遊ばず、屋内で少人数でゲームばかりしている。外に出ないと近所の人も子どもの顔を覚えられない。

親の躰ができていない。教員や習い事の指導者に任せていることもある。家庭内での躰の意識が薄れてきている気がする。

1人親家庭が孤立する傾向があり、そういった場合は子どもも孤立してしまう。

#### ○藤田室長

個人情報の問題もあり、子どもが生まれても地域がそれを把握していない場合がある。昔は、近所同士の付き合いがある中で、どこに子どもが産まれたということを把握していた。

#### ○J氏（金閣学区主任児童委員）

町内会長さんが把握していても、個人情報を気にして言わないような現状。

#### ○藤田室長

近くに親が住んでいても、頼りたくないという人も多い。子育てに関する考え方が多様化している。「子育てについて、他人に頼らない」という考え方の親が増えていると感じる。

自分の考えと合わない人と関わることに不安を感じる人も多い。考え方が多様化していることが、人に頼りにくいということに繋がっているのではないか。

ヘルパーや保育園の二次保育など、行政の子育て施策を利用することにより、地域と繋がってなくても、何とか子育てをしていけるようになっている。

#### ○谷まちづくりアドバイザー

行政施策が充実しているが故、近所の人との助け合いが希薄になっているということがあるかも知れない。

#### ○E委員

近所の人に相談するよりも、行政の開催している会に出席する方がいいということ。

#### ○J氏（金閣学区主任児童委員）

行政は、安心でき、信用もできる。近所の人には信用できないということがあるかも。近所の人に個人情報も知られたくないというようなこともある。

#### ○藤田室長

中には、地域の助けがある、ということも知らない方もいる。

#### ○L氏（大谷大学生）

実家は滋賀の田舎であるが、北区に来て、近所で子どもの姿を見ないと感じる。実家の辺りは、近所の子どもが今何年生なのかなど、全員知っている。

#### ○谷まちづくりアドバイザー

田舎と今住んでいる地域と何が違うのだろうか。

#### ○L氏（大谷大学生）

京都は都会で、ツンツンしている人が多いのではないかと感じる。

#### ○谷まちづくりアドバイザー

自分も学生の頃、金閣学区に13年住んでいたが、地域との交流はほとんどなかった。町

内会のお誘いもなかった。

### ○K氏（北区担当保育士）

子育て情報がインターネット上に多すぎて、どの情報を信用すればいいか悩んでおられる親が多いのではないかと感じる。人に相談する前に、ネット上の情報に惑わされている人が多いと感じる。また、地域に支援があることをご存じない方と、知っていても利用しないという人がいる。

支援の場を利用しないで、ショッピングモールなどに行って日々を過ごしている人も多いと感じる。遊具などもあるし、子どもが退屈しない。コミュニケーションを取らなくてもすむような状況。

### ○谷まちづくりアドバイザー

ショッピングモールの方が支援の場より魅力的に見えているということか。人と関わるのが苦手ということか。

### ○K氏（北区担当保育士）

魅力的に見えるというよりは、コミュニケーションも取らなくていいし、楽ということかと思う。また、普通が普通でない、常識と思っていることが全く違う親もいる。

### ○E委員

例えば、すごく遅い時間に子どもを連れ回している親を見掛けることもある。

### ○K氏（北区担当保育士）

生活面においても、このくらい片付いているのが普通というところで、ものすごく物が散乱しているというようなことなど。

### ○J氏（金閣学区主任児童委員）

子どもの頃に家族団欒の時間を過ごさずに大きくなった人は、自身が子育てをするときにも経験がないので、家族団欒という感覚がなかったりするようなこともあるかも。

### ○K氏（北区担当保育士）

旅行にいった経験がない、というようなこともある。

### ○E委員

町内会を大切にすべきだと思う。自分は、地藏盆や運動会に参加しましょうという声掛けをしている。近所付き合いは非常に大事。災害が起きた時に、あそこには何年生がいるとか、分かった方がよいと思う。

自分は大將軍学区に住んでいるが、氏神さんの神社でお神輿を担ぐことをきっかけにして、お母さん同士や子ども同士の繋がりが持てるように取り組んでいる。

また、子育て（PTA）が終わっても、継続して地域に関わってもらおう努力をしている。大將軍学区では、教育後援会という組織があり、そこに関わってもらおうように声掛けしている。

先ほど、躰の話が出た。イベントで無料の焼き芋を配ったが、大人が「ありがとう」と挨拶をしないような現状。

結婚はしたいが経済力がない、子どもは欲しいが共働きでないと生活できないという若い人が多いのかもしれない。共働きになると、地域に出る時間的、気持ち的な余裕がない。

家にこもるような方には、地域の方々の積極的な声掛けが必要だと思う。

## <Dテーブル>松井まちづくりアドバイザー

### ○松井まちづくりアドバイザー

皆さんがどのように子育てに関わっておられているか、1人ずつご紹介いただきたい。

### ○N氏（金閣学区体育振興会）

現在、自分の孫が金閣小学校に通っている。30年前には娘も金閣小学校を卒業している。自分の子どもとより接するためにどうしたらいいか考え、体育振興会を通じて地域活動をすることにした。

30年前と違い、最近の先生は、友達感覚で子どもと接している。そのような違いを感じながら、子どもたちを見守っている。自分たちが親しく接すると子どもたちも心を開いてくれる。

### ○Z氏（日赤北区地区衣笠分団）

社会福祉協議会で子育てサロンを実施している。

自分には子どもがいない。昔、学校運営協議会に出席した時に、なぜ子どもがいないあなたがここにいるのか？と言われたことがある。その時には傷ついたが、学校にいる子どもすべてが、自分の子どもだと思って接していると切り返した。そんな風に言われる人もいる。

最近、子どもたちが私の顔を見ると、挨拶してくれ、嬉しく思っている。

### ○M氏（紫竹児童館）

児童館では、子育て支援の仕事を行っている。

児童館は、学童クラブ事業と、0歳から18歳までの児童を取り巻く保護者や地域の方々の利用が中心。

しかし、ここ何年かは、初めてのお子さんをお持ちのお母さんの利用が顕著に増えている。元々児童館は未就学児を対象にした事業を行うのが強みだったが、最近は1～2歳の利用も多く、特に0歳児の利用が多い。

初めてのお子さんを持たれ、不安を抱えておられる親御さんは、30代のキャリアウーマンの方が多い。そういった方々は、いろんな情報は持っているが、いざ自分が子どもを育てるとなるとどうしていいか分からないという、頭でっかちな状態になっておられる。

児童館もそういったお母さんを対象にした事業を実施している。

### ○O氏（柘野学区主任児童委員）

主任児童委員として、赤ちゃん訪問事業と子育てサロンを行っている。保健師さんが4箇月の赤ちゃんを訪問されるが、その時に主任児童委員や赤ちゃん訪問の紹介をしてもらい、希望される方のところに訪問している。

まだ、お散歩や公園に出られない赤ちゃんのいるお母さんを訪問するので、概ね引きこもり状態になっておられる。そんなお母さんに、近所に赤ちゃんはおられるかと聞くと、赤ちゃんがおられる気配はするけれど、分からないという人が多い。そんな方に、児童館などで行うサロンを紹介すると、大抵の方は行きますと言われる。

子育てサロンなど、一歩外に出れば、仲良しの友達ができる。一歩踏み出す機会を私たちが作ってあげればと思う。

### ○J氏（大谷大学生）

自分は、区役所で行っている、すすく赤ちゃん広場に大谷大学生として関わっている。赤ちゃんと一緒に遊んだり、地域ごとのブースに分かれてお母さん同士の交流などを行っている。

実習の中では、0歳児に関われることが少ない。首の座っていない赤ちゃんを抱かせても

らえることは大変貴重な体験である。

### ○F委員

今は、地元の中学校の学校運営協議会に関わっている。少し前までは、小学校と中学校と両方に関わっていた。その前には、少年補導の会長、PTA会長、学童の会長、保育園の保護者会長なども行っていた。自分自身、子育ては楽しかった。

中学校では、試験の前に落ち着いて勉強をする時間を作るボランティアのようなものを、中学校の教室で行っている。

勉強できる子もできない子もいる。家でゆっくり勉強する時間がない子どものために始めたことだが、今は、学校のほとんどの子どもが来るようになった。

始めたのには経過がある。昔、学校が荒れていて、殺人事件が起きた。それを受けて、地域の人と一緒に命を大事にしようということになった。

地域の各団が、学校に入って子どもたちと関わるようになり、挨拶をすることから始めた。徐々に顔見知りの関係ができ、学校の外で出会っても挨拶するようになり、町の人達の印象も変わってきた。

### ○鈴木係長

自分は、3人の子どもがいる。両親は近くにおらず、典型的な核家族。1人目のときは、妻も近くにママ友のような存在がおらず、自分も仕事が凄く忙しい時期で、すごく大変だった。そこで救われたのが、児童館の赤ちゃんサロンの存在。ママ友ができて、そこで落ち着いた印象がある。

自分が子どもの頃は、地域のおっちゃんに叱られたり、学校でもしつかり叱ってもらったと思っているが、今はそういうことがない。

妻は、田舎で育っているのでも、たまに田舎に帰ると、出会った地域の方が声掛けてくれる。でも、京都はそういったことがなく、寂しいと言っている。

また、公園にいる子どもが、電子ゲームをしていることが気になっている。コミュニケーションが下手な子どもが多くなるのではと不安を感じる。

### ○桑原係長

仕事では主任児童委員の支援をしているので、直接赤ちゃんやお母さんと関わることはないが、2人の子どもがいる。

自分も1人目を産んだ時に孤独になったが、外出のきっかけは児童館だった。児童館の委員や保育園の委員もしていた。

いろんな親御さんが言いたいことを言って来られるので、大変な思いもしつつ、仲良くなったと思う。

地域の方との関係については、自分の家のお向かいさんがとても協力的で、赤ちゃんを預かってくれたりした。「自分もしてもらったから、あなたにもするのよ、あなたもまた、誰かにしてあげてね。」という、よい連鎖が続いている。

公園で自分は子どもを叱るが、周囲で子どもを叱っているお母さんは少ないかもしれない。

### ○松井まちづくりアドバイザー

周りの大人が口うるさいというのは、大事なことだと思う。それは、子どもの有無によらないのかもしれない。

### ○N氏（金閣学区体育振興会）

自分の子どもと同等に他人の子どもを叱るということは、なかなか難しい。他人の子ども

には甘くなるものだが。

また、自分の孫は、児童館がとっても楽しいと言って通っている。

### ○M氏（紫竹児童館）

児童館は、勉強する場所ではなく、人間関係を形成するための勉強ができる場所であると思う。子ども同士の関係だけでなく、大人との関係もある。

## <Eテーブル>朝倉まちづくりアドバイザー

### ○朝倉まちづくりアドバイザー

子ども、子育て、子育て世代といったことをキーワードに普段皆さんが気になっているところをお話いただければと思う。

### ○W氏（大宮学区民生児童委員）

全国的に子どもの事故・事件が多く、10年ほど前に大宮学区で見守り隊ができた。様々なタイミングで子どもを見守っている。自分の住んでいる町内では、子どもが外で遊ぶ姿を見るが、ある町内では「子どもの声がうるさいので、外で遊ばせるな。」という人がいると聞く。向こう三軒両隣の精神がとても大切。各町内の在り方、普段からの近所づきあいがとても大事だと思う。

子どもと顔なじみになることで、ほかの場所であっても声掛けしやすい。親も防犯上の観点から、知らない人に声掛けられても返事したらだめよと言っているが、見守り活動を行っている、子どもの方も顔を覚えてくれて、ほかの場所であっても、知っているおばちゃんやということで声掛けをしてくれる。思わぬところで見掛けても声掛けができる。

### ○R氏（紫明学区社会福祉協議会）

自分は社会福祉協議会でお年寄りを対象にした事業を行っている。今はお年寄りに社会の比重があるが、もっと子どもの方に向いていきたいと思っている。若いお母さんの居場所づくりということで、すこやかカフェを実施しているが、人が来られない。

先ほど、子どもの声がうるさいというようなお話があったが、そういったことについては、地域の中でしっかりと解決していかなければいけない。子どもを守るために声を上げることが必要だと思う。

若い人は、今後結婚をされていかれると思うが、仕事、結婚、子育てについて、どう思われているか聞きたい。

### ○Q氏（大谷大学生）

大学で行っている授業に、赤ちゃんを連れてお母さんが来られるが、大学で行っているものなので気軽さが無い。地域の中で知っている顔がやってくれていたら、もっと安心して行けると思う。また、相談する相手がいないお母さんが多いのではないかと思う。

### ○朝倉まちづくりアドバイザー

ニーズがあるのに、地域に繋がらないという意見が出たが、いかがか。

### ○W氏（大宮学区民生児童委員）

大宮学区では子育てサロンを年に4回行って、概ね15組ほどの親子が参加される。お母さん同士の繋がりも生まれている。そこから大谷大学で行っているすくすく赤ちゃん広場に繋がっていったりもする。

### ○V氏（そらいろチルドレン）

自分は、新大宮商店街で、小学校1年生から高校3年生までの発達に障害のある子どもさ

んの預かりをしている。活動のきっかけは、長い期間子どもに関われるということが理由。親御さんと共に子どもの成長を一緒に見守らせてもらう必要性を感じている。信頼関係も生まれる。ずっと見守っていてくれる存在というのが、親御さんの安心感にも繋がる。利用者は、10人前後で、いろんな行政区から来てくれる。

### ○G委員

元町学区にも子育てのサロンがある。また、いちごクラブという、有料の子育ての学び教室を元町会館を利用して実施されている。子どもが産まれた時には、5千円のお祝いを社協の会長と町内会長でしている。年間で14～15人。

元町小学校は、1学年20人前後、全校生徒も100人規模ですごく小さい。社協としては、いろんな行事にPTAを巻き込むようにしている。

### ○P氏（鳳徳学区民生児童委員）

鳳徳学区でも、紫野児童館をお借りして、年4回ちびっこ広場を開催している。いろんな学区から集まって来られる。主任児童委員や民生児童委員が、子どもさんが産まれられた各家庭を訪問している。

### ○室谷課長

仕事から、子どもと接することが少ない。地域コミュニティの希薄化と言われるが、地域との繋がりが少なくなっている。地域の人のお世話にならなくても生活できるという高齢者の人もおられる。地域のコミュニティに入れれないのが悪いということではなく、地域側も敷居を低くしないとコミュニティに繋がれない。

電車に乗ると、早朝にも関わらず、私学の子どもが乗ってくる。朝早く、夜遅く帰ってくる私学の子どもは、なかなか地域の子どもと繋がりにくいかもしれない。

### ○P氏（鳳徳学区民生児童委員）

教育に関してあれこれは言えないが、小さいうちから私学に行っている子どもも多くいる。

### ○G委員

放課後学び教室について、小学校の学年が上がるごとに塾に行くなど、忙しくなって参加率が下がってくる。社会の環境が変わってきている。

### ○朝倉まちづくりアドバイザー

私学に行っていると、地域の中では同級生でも、友達でないということもあるかもしれない。

### ○R氏（紫明学区社会福祉協議会）

紫明学区では、比較的活発に地蔵盆を行っている。公立、私学に関わらず、地蔵盆の機会に仲良くなる。地域側は積極的にそういった場を提供することが大切。区民運動会、地蔵盆など、世代を超えたコミュニティができる場所が大事。

### ○政石係長

赤ちゃんの家庭訪問などに行くなど、赤ちゃんやお母さんに関わるが多いが、核家族であったり、おじいちゃんおばあちゃんと一緒に住んでいないことから、身近に相談する相手がいな人が多い。家の中でもお母さんだけで育児している状況が多いと感じる。また、2人目を産むということへのハードルも上がっている。

家族の形態が変わったことによって、お母さん自身のストレスも多くなっている。

すすすす赤ちゃん広場でも、学区ごとにお母さんと地域の方との交流があり、その場でも、地域にこんなに支援者がいることを初めて知ったという人も多かった。顔の見える関係がで



できれば、学区のサロンにも足を運びやすくなる。

#### ○R氏（紫明学区社会福祉協議会）

2人目以降を考えた時に、待機児童の問題がハードルとなる。行政として解消していかないといけない。

#### ○P氏（鳳徳学区民生児童委員）

すくすく赤ちゃん広場の機会に地域と繋がった人が、学区で開催するサロンにも来てくれる。

#### ○G委員

元町学区では町内会長と社協がしっかり連携している。世帯調査なども行い、何人世帯かというところも把握している。

#### ○P氏（鳳徳学区民生児童委員）

鳳徳学区でも名簿を作っている。赤ちゃんが産まれられたら、知らせてきてもらえる体制になっている。

#### ○R氏（紫明学区社会福祉協議会）

マンションが難しい。情報収集をどうやってやるかが課題。社協、民協、市協などが協力していくことが大事だが、個人情報の壁で、難しいことが多い。情報が得にくい。

#### ○G委員

お祝いなどのきっかけを基に、町内に情報を出してもらおうようにすればいいのではないか。

### <Fテーブル>河野アドバイザー

#### ○塚本氏（楽只保育所）

自分は今年町内会の役を行っているが、町内会に入る人が減って来て、自治組織の力が弱くなってきていると感じる。町内会に入る人が減ると役が早く回ってくるので、余計に入るのを嫌がる人が増え、悪循環になっている。

子どもだけでなくみんなが住みにくくなってきているように感じる。

近所で子どもの泣き声が聞こえて気になっても、顔の見える関係性でなければ、声を掛けにくい。

#### ○S氏（鷹峯自治連合会）

昔に比べて、人のために何かする、ボランティア精神のようなものが、少し減ってきている気がする。自分のことだけでなく、人のため、地域のため、という気持ちを持っていたければ少し変わるのではないか。

今は、人に関わるのにハードルを感じる人が多いと感じる。

悩み事があっても、インターネットの情報に頼り、近所の人に相談するというようなことは減っている。

#### ○X氏（鳳徳学区主任児童委員）

主任児童委員として、おせっかいおばさんになろうと思っている。見守り隊として挨拶をすることを通じて、子どもの成長が見守れる。小さい頃挨拶をしてくれていた子どもが、年ごろになり挨拶なくなり、見た目も派手になり心配をしたり、その子が子どもを連れて地藏盆に参加してくれたりなど、一連の成長を見守れる。

諦めないで挨拶をし続けることが大切だと思う。

すくすく赤ちゃん広場に来ていた1人のお母さんが、「自分は子どもが嫌いだ、何で子ど



もを産んだんだろう。」と言われ、これはいけないと思った。

どこの学区にお住まいかを聞くと、自分の住んでいる学区だった。それを受けて、自分の学区でとにかくお母さんに来てもらって話ができる場をと思い、ぴよっこ赤ちゃん広場を作った。おせっかいを焼き続けることが大切だと思っている。

### ○Y氏（楽只保育所）

保育所は保育所の空いている時間しか関わることができない。そのため、地域と繋がり、連携をしながら、子どもと地域の方とを繋いでいきたいと思う。

子どもが地域の方の顔を覚えて、親に伝えることで、大人同士が繋がることもある。

### ○加島課長

自分は奈良の新興住宅地に住んでいるが、子育てに困っているときに、地域の方に手を差し伸べていただき、とても有難かった。その後自分も自治会の役員になって、恩返しをしようとしている。

### ○T氏（大谷大学生）

大学生が子どもと関わる機会が少ない。子どもだけでなく、高齢者の分野でも、全体的に子どもと関われる、交流できる場があればいいと思う。

### ○U氏（ほっとマナ）

紫竹学区にある聖書教会で活動をしている。多世代の居場所づくりを目指している。自分は子どもが4人いるが、一番上の子どもが産まれた時に、教会を使わせてもらい、子育てサークルを作った。昔は、大変盛況だったが、今は参加者も減ってきている。参加者の動向を見ていると、大きなコミュニティに入ることに不安を感じる人が多いように思う。数人の小さいコミュニティの方が安心されるようだ。

自分たちは、学習支援、子ども食堂、子ども会を行っているが、地域でも広報板に貼らせていただいたりという協力をいただいている。

### ○S氏（鷹峯自治連合会）

顔の見える関係ができていれば、あの人が言うなら、行かないとな、やらないとな、と思ってもらえる。

### ○H委員

様々な取組をされるときに、お母さんが1人で参加されることが多いと思う。日本では、高度経済成長期以降、男の人は働いて、女の人は家で家事をしてという機能型な形で家庭が動いているが、その関係は壊れやすいと思っている。

1人目を産んだとしても、子育てを夫婦で助け合って行えなければ、2人目以降を持つと考えると考えられない。

地域の活動にも、来るのは夫婦のどちらか1人ということが多いと思うが、夫婦で参加していいような雰囲気を作っていくことが必要だと思う。

ヨーロッパでは、出生率が回復している。それは、夫婦が共に協力していくことの大事さ、夫婦の関係が見直されたことが大きいと思う。地域でも夫婦で来たらどうかということ地域からも提案してはどうか。夫婦で共通体験することが大事だと思う。

### ○U氏（ほっとマナ）

家族や多世代間交流を行いたいと思っている。子どもだけ、高齢者だけでなく、家族の繋がりを深めていきたい。

## 【各テーブル発表】

### ○藤野部会長

それでは時間が来たので、各テーブルからの発表に移っていただきたい。Aテーブルからお願いします。

## 【Aテーブル】

### ○西原まちづくりアドバイザー

子育て世代が、どんなところに不安を感じるのかということ話を話していた。

金銭面での不安は大きい。また、子どもが病気をしたときに困ることが多い。

気持ちの部分では、親として上手く子どもを育てられているのかという不安もある。そういった不安について、子育て中の人と話すことで解消できることも多いが、そのためには、子育てへの労力だけでなく、更に人との繋がりを作っていくための努力をしないといけない。更に頑張らないといけない状況にある。

気軽に、当たり前相談できるような、共感してもらえるような環境をどうやったら作っていただけるか。

子育て世代と関わるタイミングとして、妊娠、出産、サロン、幼稚園・保育園、小学校という段階があるが、妊娠期を捕らえて何か施策ができないかなというところで話は終わった。

## 【Bテーブル】

### ○吉田まちづくりアドバイザー

今の子どもは、習い事が多い。就学前から習い事を始めていて、体育振興会の行事への子どもも参加が減ってきている。

また、親が子どもに手を掛け過ぎているのではないかという意見もあった。子育てでの負担や不安を、地域での見守りやサポートで解消できたらいいのに。

昔は、他人の家に遊びに行ったときに、他人からも叱られることで育ててもらったり、銭湯で多世代の交流などがあったが、今は、他人の子に怪我をさせたらどうしようというような不安が先に立つようである。

所得が低いと子どもが作れないという意見がある一方で、高学歴だと晩婚化になるというような話もあった。

子育てに関する優先順位を高めていけるかがポイント。地域に安心できる場があれば、2人目3人目を作ろうという気になるのではないか。また、学区によって子どもの数にばらつきがあるので、北区内で平準化できないかということ。

そもそも、この人のために子どもを産みたいと思わせるような男性を増やすべき、という叱咤激励もあった。

## 【Cテーブル】

### ○谷まちづくりアドバイザー

3つお伝えしたい話が出た。1つ目は、地域の中で挨拶する文化がない。子ども同士だけでなく大人同士もない。イベントなどで物をもらってもお礼も言わない、これは問題だという話。

2つ目は、核家族が増えていることについて。核家族は、子どもを育てる機能が弱い。だからこそ、近所にお手伝いしてもらうことが大事であるが、今はそれができていない。

なぜ外に頼らないかという点、人との関わりに不安を感じているのではないかということ。近所の人ではなく行政に頼る人が増えている。それは、近所の人より、行政の方が信用できるから。

近所の人信用できないから、地域のサロンにも出かけたくない。人と関わらなくて済むショッピングモールなどに行って時間を過ごす人が多い。

近所の人との信頼関係をどのように作っていくかということが鍵だという話だった

## 【Dテーブル】

### ○松井まちづくりアドバイザー

1人目の子どもを産んだお母さんの不安が大きい。0歳児を連れて外に出られず、引きこもってしまう。そこへのアプローチをすることで、最初の第一歩が繋がっていく。

児童館での地域サロンに救われたという話が多数出てきた。

子どもと地域の関係性について。小学校でも、先生が友達感覚で子どもと接しているようであるが、地域の人もそのような感覚で接することで、子どもとの距離感が変わってくるというお話があった。

近所の人との距離感について、京都の人は冷たいという話もある一方で、お向かいさんに子どもを預かってもらった経験があるので、自分も預かるというようなこともあるようだ。

地域の皆が子どもを叱ることが重要だという話が出ていた。

## 【Eテーブル】

### ○朝倉まちづくりアドバイザー

子どもが外で遊んでいると、うるさい！という人もいる。隣近所の関係が大事。地域にどんな人がいるかを知っておくことは重要。

核家族化でお母さん同士の繋がりも少なく、孤立している中で、児童館など支援者が繋がれる場所の存在は大きい。また、地域の子育てサロンについて、たくさん話が出てきていたが、いい取組は継続することが重要。長年続けていくことで、地域の中での信頼感にも繋がる。

地域の中で子どもの通う学校はバラバラでも、地蔵盆など繋がれる場所があれば、顔見知りになれる。

## 【Fテーブル】

### ○河野アドバイザー

自治組織の力が弱まってきている。マンション内の人間関係について、子どもが泣いていても顔の見える関係でなければ、声を掛けられないという話があった。子どもに気軽にお菓子や食べ物をあげるということも、最近は気を使う人が多い。

また、地域活動に自分の時間を割く人や町内会に入る人も減ってきていて、子どもが参加する地蔵盆などを運営するのも大変になってきているが、自治組織の力をしっかりすることによって子どもが集まってきやすい環境ができるのではないかと。

日本は、男性は外に働きに出て、女性は家で家事をするという機能性を重視した夫婦関係

であったが、それは壊れやすい。地域活動に夫婦で参加することを通じて、夫婦関係も変化してくる。そのことが、出生率を向上する一助になるのではないかということだった。

## ○樋掛室長

ありがとうございました。ただいまのお話合いの結果、どのような取組ができるかについて、15分間テーブルでご議論いただきたい。

## 【②各テーブルのワークショップ】

### <Aテーブル>西原まちづくりアドバイザー

#### ○西原まちづくりアドバイザー

地域として、子育て世代に気軽に話し掛ける、話し掛けられる関係をどうやって作るかということ。

#### ○A委員

今は児童館が人を繋ぐ場となっている。上賀茂学区では、体育振興会の陸上部が毎週月曜日に子どもを集めて陸上の練習をしている。親は見に来るだけでなく、手が足りない時に手伝ってくれている。子どもを通じて親と繋がる機会がある。

#### ○D氏（元町社会福祉協議会）

どこの地域でも民生児童委員や少年補導などで、子どもと接する機会を色々作っていると思うが、どうやって広げていくかが課題。子どもを対象にしたものはあるが、親を対象にしたものがない。

#### ○片木課長

かえるキャラバンなど、子どもが喜ぶような体験を設けているイベントに子どもが行きたいと言えば親は付いていく。そのようなイベントが多くあれば、その機会に親同士の会話も生まれるかもしれない。

#### ○西原まちづくりアドバイザー

地域は長く付き合っていく関係性。イベントは単発の関係で終わる。地域のイベントとショッピングモールでのイベントが同列になっている。イベントに参加して、人との交流を求めるといふよりは、単に楽しむというところに留まってしまう。

#### ○B氏（元町学区民生児童委員）

地道なことになるが、地域で出会ったら挨拶して、顔を覚えてもらって、そこから相談に繋げていくことが大事。

#### ○四元係長

挨拶を通じて地域の方と顔見知りになり、その人が誘ってくれたりすると、参加しようと思う。

#### ○西原まちづくりアドバイザー

挨拶することから初めて、顔見知りを作り、そこからの情報でイベントの参加に繋げていく、といういい流れ。役割の問題ではなく、地域のみんなでそういった声の掛け合いができればいい。お節介する側も、壁を乗り越えないといけない。

#### ○A委員

上賀茂学区では、子どもを対象にしたイベントをたくさん行っている。地域側がやる気を持って、地域が一体となってイベントを実施している。

## ○D氏（元町社会福祉協議会）

子どもたちとも接する機会が沢山あれば、子どもたちも覚えてくれる。道で子どもに会うと、「横山さんや！」と言ってもらえるようになった。

## <Bテーブル>吉田まちづくりアドバイザー

### ○C委員

地域で、子どもが産まれたことを把握できていない状況。誕生祝をするような習慣を作れば、誕生を把握できるようになるかもしれない。

### ○F氏（上賀茂学区民生児童委員会）

北区では赤ちゃんが誕生した時にお祝い訪問を行っている。地域は保健師が家庭訪問を行っている。

### ○C委員

訪問していても、その状況が地域に伝わっていない。子どもが産まれたということを自主的に地域に言ってくれるような仕組みができれば。

### ○吉田まちづくりアドバイザー

主任児童委員さんは、希望された方のところにだけ行くが、希望された人の情報は地域には出せないということ。

### ○C委員

民生委員や主任児童委員は守秘義務があり、個人情報を出せない。それは仕方ないことだと思う。なので、町内会長に情報が集まるようにすればもう少し楽に動けるかもしれない。

### ○川妻部長

例えば、学区で、赤ちゃんを対象にした事業などを実施されるのであれば、訪問の際にお母さんにお伝えすることはできる。また、区で行っているすくすく赤ちゃん広場などで、学区の方とお母さんを繋ぐような取組もしている。

### ○C委員

学区によってばらつきがあるので、仕組みを作って底上げする必要がある。

### ○B委員

上賀茂ではネットワーク会議を設けている。児童館を中心に子育てに関わる団体が一同に会する。バラバラに行っていた時は情報交換ができずに、各施設が同日にバラバラで開催していた。

### ○吉田まちづくりアドバイザー

地域の中で連携して情報交換することは重要である。

### ○C委員

地域のサロンなどに来られない方をフォローできる仕組みを考えなければいけない。

## <Cテーブル>谷まちづくりアドバイザー

### ○谷まちづくりアドバイザー

私たちに何ができるか、アイデアを出していただきたい。

### ○E委員

ツンツンしていると思われなためにも、笑顔で挨拶。共働き家庭が多いので、保育園探しができるようにしてあげたい。希望している保育園に入れるようにできればいいが。

小学校に行くからの負担を減らすためにも、児童館を充実してもらいたい。

生活コストを何とか減らせるようになれば。

#### ○K氏（北区担当保育士）

近所の人の声掛けが大切。地域には民生児童委員や主任児童委員がいるので、児童館や行政とも連携し、全体で連携した支援ができる。

また、子育ての悩みを言える場づくりも大切。保育所に入りにくいということが、2人目以上の子どもを産むためのハードルになっている。

#### ○L氏（大谷大学生）

幅広い年齢層の方が参加できる地域イベントを作ることや、小学校の見守りを通じて子どもと大人のコミュニケーションを図る機会を作ることが大切。

自分は小学校で挨拶することを通じて、地域の人にも挨拶するような習慣ができた。

#### ○藤田室長

やはり、めげずに継続的にみんなで声掛けをしていくことが大切。また、地域毎で、こういった語れる場が持てたらいいのになと思う。

#### ○中山課長

地域行事でも、参加者が固定化する傾向にあるので、参加してもらうには、1軒1軒回るような努力や工夫が必要かもしれない。

#### ○J氏（金閣学区主任児童委員）

相手が不快にならない程度のおせっかいが必要。また、1人1人、夫婦が仲良くいられれば、若い人たちに結婚っていいなと思ってもらえるかもしれない。若いお母さんに頼ってもらえるような関係性が作れたらいいが。

#### ○D委員

シャッターを開け、まちを明るくすれば地域の人も明るくなるのではないか。また、1人1人への声掛けが大切。

#### ○I氏（鷹峯自治連合会）

声掛けが大切。まずは私たち大人が積極的に声掛けを実施すべき。子どもたちは恥ずかしいと思う気持ちがあるので、まずは大人から挨拶していくべき。

#### ○E委員

町内で大人も子どもも参加できる忘年会を行うが、そういったことも、家から出てきてもらうための声掛けの一つ。

最近では地域行事も運営側への負担が増えてきている。負担を減らすために開催時間を短くするなどしたが、参加者が減り、本末転倒のようになってしまっている。

地蔵盆実行委員会のようなものを作って、町内のイベントとして盛り上げていきたいと思う。

#### ○藤田室長

自分がしている子育てを人からどのように評価されるかを気にする人が増えている。そんな中で、昔ながらのおせっかいおじちゃんやおばちゃんが出て、「そんなことしたらアカンよ！」などと言われてしまうと、とたんに消極的になる。

自分や自分の悩みを受け止めてもらえる関係性が大切。そうすると、相手も心を開いてくれる。

#### ○谷まちづくりアドバイザー



確かに、相談して怒られたり、馬鹿にされたりすると、相談する気にならない。

## <Dテーブル>松井まちづくりアドバイザー

### ○松井まちづくりアドバイザー

子ども、地域の大人、親の三方の関係性の話、児童館の存在、居場所の話があった。どうすれば取組が強化できるかといったアイデアを出してもらいたい。取り組んでみての改善点といったことでも構わない。

子どもができた時に、地域の方と親が繋がるために、どういうことがあればいいだろうか。

### ○M氏（紫竹児童館）

児童館では、区役所の検診の時に出向き、そこで児童館の宣伝をしている。また、京都市の施策で初めての子どもさんができたご家庭に、ごみ袋の無料配布をしている。役所か児童館でお渡しする流れになっており、そこで宣伝もできる。

### ○松井まちづくりアドバイザー

児童館に繋がるルートはあるということだが、地域の人が繋がるにはどのようなルートがあるのか。

### ○N氏（金閣学区体育振興会）

金閣学区では、若い人の民生委員を中心にして、ママさんサロンをやっている。初めは不安な表情をしておられるお母さんも、交流を通じて、徐々に明るい表情になってくる。

参加者も増えてきている。民生さんは、頑張って呼び掛けされている。

### ○O氏（柘野学区主任児童委員）

産まれたら町内会長さんに教えてね、という流れになっている町内会もある。産まれたらプレゼントを持っていくようなことも。

### ○F委員

京都の町へのデビューの仕方に、地蔵盆がある。お地蔵さんの涎掛けに新生児の名前を書くのが本来の地蔵盆。そういったことが親御さんに地域に出てきてもらうきっかけになる。

本当は新生児の子どもたちが地域デビューするための仕組みだが、今は小学生が中心になっている。

### ○N氏（金閣学区体育振興会）

自分たちが小さいときは地蔵盆は2日間あり、夜も遊べるような行事だった。1年間で子どもが一番楽しみにするようなイベントだった。町内の運動会も盛り上がるが。

### ○F委員

地域に密着したところで顔を合わせるような機会が多くあれば、顔見知りになる。そういった機会が沢山あることが大事だ。

## <Eテーブル>朝倉まちづくりアドバイザー

### ○G委員

元町学区はとにかく挨拶をすることを大事にしている。挨拶することで顔の見える関係が作っていきける。場を作って待っているだけでは、難しい。サロンへも、来てねという声掛けが大切。回覧板を回していても、気づかれにくいらい。

### ○P氏（鳳徳学区民生児童委員）

声掛けが一番大事だと思う。見守りをしていると、通勤の方も含めて、知らない人だけ

ど挨拶し合えたりする。

### ○Q氏（大谷大学生）

顔を合わせる機会が増えれば、お母さん同士が友達になってくる。また、学生としては、関わらせてもらうことが有難いと思っている。すすすく赤ちゃん広場は年1回しかないが、もう少し機会が増えればと思う。

### ○P氏（鳳徳学区民生児童委員）

そらいろチルドレンのようなところと一緒にあって、障害の有無にかかわらず取組ができればと思う。

### ○R氏（紫明学区社会福祉協議会）

船岡スタンダードのような、障害の有無に関わらず、みんなが楽しめる祭に、たくさんの人に行ってもらいたい。広報も貼っておくだけでなく、一言添えるというようなことが必要だ。

### ○G委員

公的な施設、自治会館というようなどころだけでなく、直接声掛けをして顔の見える関係の中で声掛けすることが大切だ。

## 【Fテーブル】河野アドバイザー

### ○S氏（鷹峯自治連合会）

鷹峯小学校は、平成23年にグラウンドが大きくなった。それにより、様々な活動がグラウンドで行われるようになった。昼は子どもが使い、夜は大人が使う。その交代のタイミングで、挨拶ができるようになってきた。グラウンドを利用する条件として、指導者に挨拶はとにかく、しっかりしようということを決めた。それによって、人間関係が繋がってくるようになった。

挨拶できる子どもが増えると、下の世代にも繋がってくる。

### ○T氏（大谷大学生）

自分はずっと京都なので、近所の人との挨拶は当たり前に行っている。自分にとっては挨拶するのが普通だが、新しい人が引っ越して来られた時に、自分から声を掛けられるかというところ、気恥ずかしいところがある。

### ○U氏（ほっとマナ）

一緒に門掃きをすることで、地域と繋がっていけると感じる。人間関係が繋がっていくことが大事だ。器を作っても、来てくれない。そういう人をどのように繋いでいくかがポイントになる。



## 【各テーブル発表】

### ○藤野部会長

それでは、各テーブルにおいて、議論の内容を発表していただきたい。Aテーブルから順番にお願いする。

## 【Aテーブル】

### ○西原まちづくりアドバイザー



地域の中で、気軽に相談できる、当たり前話し掛け合える関係づくりには、やはり挨拶が重要だという話になった。挨拶を通じて顔見知りになり、気に掛ける関係、信頼関係を作っていく。

地域の多くの人が子育て世代に気軽に接することができるように、そういう機会を多く作っていくことが重要だという話になった。

## 【Bテーブル】

### ○吉田まちづくりアドバイザー

地域でどれだけの赤ちゃんが産まれているかを把握できていない状況がある。保健師や主任児童委員の訪問はあるが、個人情報の関係で中々情報共有できない。そういった訪問時にできるだけ地域の情報を渡してもらいPRしてもらいたい。

何歳児お誕生日会などオープンな場、気軽に参加できるような場があればいいなという意見があった。

子育てサロンに来られない人をフォローできる仕組みをどのように作るかが、今後の課題。

## 【Cテーブル】

### ○谷まちづくりアドバイザー

まずは、声を掛けることが大事。子育ては悩みが多く、そういったことを気軽に相談できることが地域に求められている。しかし、子育て中の親には、相談すると怒られるのでは？馬鹿にされるのでは？というような不安感がある。

楽しい雰囲気、参加しやすい行事など実施し、そこへのお誘いを通じて、アピールし続ける必要がある。

このテーブルは、最終的に、相手に対してツンツンしないという話でまとまった。相手に対して、否定から入るのではなく肯定していくことが、人との距離を縮めていく鍵。

## 【Dテーブル】

### ○松井まちづくりアドバイザー

新生児が産まれたことを、どう把握するかという話になった。

児童館では、保健センターの検診で児童館の情報を流してもらったり、また、ゴミ袋の無料配布場所を役所と児童館に設定することにより、自動的に児童館に誘われるような仕組みになっているということ。

地域側としては、新生児が産まれたことを、組長から町内会長に伝わる仕組みになっているような地域もあれば、そうでないところもある。

地蔵盆のお地蔵さんに、その年に生まれた新生児の名前を書いた涎掛けをするという、本来の地蔵盆のあり方に着目し、地蔵盆の機会に新生児と繋がることができれば、という案が出た。どうやって顔見知りになる機会を増やしていくかということが、今後の課題。

## 【Eテーブル】

### ○朝倉まちづくりアドバイザー

とにかく声を掛けることを繰り返すことが大切。地域のサロンなどのごとに、しっかりと顔見知りの関係になれるようにする。また、行政が実施するものも含めて、顔を合わす機会

はたくさんあると思うので、その情報をしっかりと届けることが大事だという話になった。

## 【Fテーブル】

### ○河野アドバイザー

挨拶など、きっかけ作りが大事という話になった。鷹峯学区では、挨拶の代わりに、子どもと大人がハイタッチをする習慣があるということ。それをきっかけにコミュニケーションを図っているという話があった。

また、鳳徳学区では、何人か“お節介おばさん役”を作っていく、相手が挨拶をしなくても、意識的にこちらから挨拶や声掛けをし続けるという話も出た。

普段地域に出てこない人をどのように引き込むかというところが課題だ。

~~~~~

○藤野部会長

ありがとうございました。

ただいまの6テーブルの報告につきまして、何かご意見やご質問、補足したい点などがあればお願いしたい。→なし

いろんな意見が出てきて議論も深まったと思う。このように議論を深めていくことが大変重要だと感じる。私は人口問題を専門にしているが、出生率については、日本は他国に比べて本当に低い。もう少し上げなければ、最後にはゼロになる。先進諸国では、いろんな対策をして、出生率が上がってきている。

社会も人間関係も変化してきており、コミュニティが希薄化してきているなど、悲観的な考え方もあるが、今の社会に応じた新たな人間関係が生まれてくるのではないかと考えている。

若い世代は特に、自分の全人格を知られたくないという思いを持っている。若い人に関しては、必要な時に繋がれるような関係性がいいように思う。

また、夫婦の関係性が日本では希薄である。夫婦で地域の活動に参加したり、家族で参加するという一方で、その地域の活動内容を家に帰ってみんなで共有できる。そうすると家族の絆も深まっていくと思う。

夫婦で参加するような機会がどんどん増えていけばと考えている。

それでは、ワークショップにおける議論については、これで終了とさせていただきます。

本日の議題は以上。次回の部会では、本日意見交換いただいた内容をベースに議論を深めていきたいと思う。

それでは、会議全般について、何かご意見やご質問、補足したい点などがあればお願いします。→なし

本日は、様々な団体の皆さんにご参加いただいているが、特に、NPOの皆さんなど、団体のご活動をご紹介いただく良い機会かと思う。簡単にご紹介いただければ。

○G氏（てーげー食堂）

柏野学区でてーげー食堂という子ども食堂を8月から始めた。月1回開催している。今月で3回目となる。管理栄養士と一緒にやっているが、まだまだスタッフや情報が足りないの

で、皆さんの力をお借りできればと思う。

対象となる子どもさんは小学生だが、小さいお子さんから大人も参加できる場にしていきたいと考えている。

○V氏（そらいろチルドレン）

私たちは新大宮商店街で放課後等デイサービスを行っている。発達に特性のある小学生から高校生の放課後や夏休みの居場所づくりをしている。

秋からは不登校のお子さんの支援や、そらチル食堂というのも行っている。そらチル食堂は、利用者、利用者の兄弟や親御さんも来られている。

今回参加させていただいたことをきっかけにして、北区内の子どもさんを育てていく、一緒に見守っていく仲間に入れていただければ嬉しい。

11月4日には、船岡山公園で北区の福祉の祭があり、出店する予定。ぜひ、足を運んでいただきたい。

○U氏（ほっとマナ）

私たちは、子ども食堂や子ども会など3つの居場所づくりをしている。紫竹学区の中にある、京都聖書教会というプロテスタントの教会で活動している。私自身が協会の牧師をしている。ほっとマナの働きは、協会と切り離して活動している。

今回、紫竹学区の皆さんにご理解いただき、回覧板や地域の掲示板にポスターを貼らせてもらったり、児童館でチラシを配布させていただいている。地域挙げてご協力いただいている。皆さんの仲間に入れてもらいながら活動していきたい。

○藤野部会長

NPO団体が活動するというのも、新しい在り方だと感じる。どんどん活動が活発化することを応援したい。

それでは、これで本日予定されていた議題はすべて終了した。委員の皆さん、活発で有意義なご意見ありがとうございました。

それでは、事務局にお返しさせていただく。

○樋掛室長

藤野先生、ありがとうございました。また、本日ご列席の皆さんにおかれましても、積極的なご議論、ありがとうございました。

最後に、事務局から案内があります。本日ご出席の皆さんにご案内します。

本日の「ひと・まち活性化部会」の第2回会議につきましては、年が明けた1月18日（木）午後6時30分～8時に、この場所で開催したいと考えています。

本日ご出席いただいた皆さんにおかれては、是非、次回の部会への参加もお願いします。

なお、まちづくり会議委員の皆さんにおかれては、まちづくり会議のもう一方の部会である「地域コミュニティ賑わい部会～“自治会・町内会加入”」の第2回部会を11月27日（月）午後6時30分～8時に開催する予定です。お忙しい中、大変恐縮ですが、時間の許す限り是非ご出席いただければと思います。

それでは、本日はこれで終了いたします。長時間にわたり、最後までありがとうございました。

した。